P = 4）して SPLYZA TEAMS® 使用の有無による VSOP 評価結果を比較した。② SPLYZA TEAMS® の使用後アンケートから学生の感想を確認した。
【結果】 ① I-IV 期 vs V- VII 期 = 2.3±0.5 vs 3.2±0.6（p <.003）と V-VII 期で点数が有意に高かった。② アンケートでは「SPLYZA TEAMS® を使用してよかった」（100%）「今後の実習・研修に活かせると思う」（92%）など好意的な意見が多かった。
【考察】 SPLYZA TEAMS® による MI・SP の教育は、実習のシーンごとに教員からのフィードバックやグループ・メンバーの動画を参考にできることで復習しやすく、他の技能学習への応用の可能性が示唆された。

8-4.

授業後に学生が記述した「性的マイノリティについて医学生が学ぶべきこと」を分析しカリキュラム改善に生かす

（八王子：リウマチ科）
○青木　昭子
（八王子：総合診療科）
山口　佳子
（医学教育分野）
原田　芳巳

【背景】 医学教育コア・カリキュラムには「ジェンダーの形成並びに性的指向及び性自認への配慮方法」が含まれているが、学修内容は各大学に任されている。東京医科大学医学科では 2014 年から「医療プロフェッショナリズム」の中で、2 年と 4 年に LGBT に関連する内容を講義している。医学科 4 年生を対象に 2021 年度オンデマンドで実施した授業「多様性に対応できる医療を考える」の課題「LGBT や性の多様性をどのように学ぶべきか」に対する学生の記載を解析した。
【授業の内容】 トランスジェンダーの支援団体の代表も務める泌尿器科医師と内科医が性同一性障害と医療について講義した。
学生が必要と考える学修：e-自主自学に入力された 109 人の記載を解析した。（1）望ましい学習の時期について（86 人が記載）：70 人が低学年（1・2 年）で学ぶべきと記載し、そのうち 14 人は入学後早期に学ぶべきと記載していた。14 人が実習開始前、6 人が実習中の学修を提案し、58 人は複数回の学修を、18 人は 1～6 年まで各学年で学修するとよいと記載していた。（2）学修の内容について：56 人が LGBT 当事者の授業参加を提案していた。具体的には「日常生活における悩みや体験を話してもらう」「グループワークに参加してもらって意見交換する」などの記載があった。当事者の参加は難しいだろうと、インターネットの動画や映画の利用や、当事者ではなく LGBT の支援者や対応している医療者の参加を提案する学生もいた。（3）学修の方法について：正しい知識を得るための講義や当事者から話を聞く、に加え、グループワーク、医療面接などのロールプレイをするなど複数の学生がアクティブラーニングを提案していた。
【結語】 多くの学生は LGBT を学修する必要性や意義を感じ、能動的な学修を希望していた。授業の形態を工夫し、より効果的な学修を考えていきたい。

8-5.

院外心停止に対して ECPELLA で救命し社会復帰を果たした 1 例

（救急・災害医学分野）
○会田　健太、東　一成、石井　友理、
鈴木　彰二、澤畠　摩那、織田　順

【背景】 心原性ショックに対して、VA ECMO（venoarterial extracorporeal membrane oxygenation）と Impella を併用する治療法（ECPELLA）の有効性が近年報告されている。しかし、院外心停止患者に対する ECPELLA の有効性やエビデンスは未だ十分ではない。今回我々は院外心停止患者に ECPELLA を導入し救命した症例を経験したので報告する。
【臨床経過】 60 代男性。歩行中に路上で倒れた。目撃者により一次救命処置が施行された。救急隊接触時、初期波形は VF（ventricular fibrillation）であった。発症から病着までは 47 分であった。二次救命処置を施行し病着から 10 分後に自己心拍が再開した。心原性ショックの状態は持続しており、IABP（intra-aortic balloon pump）を導入後に PCI（percutaneous coronary intervention）を施行した。PCI 中に VF となり、ECPR（extracorporeal cardiopulmonary resuscitation）を施行した。VA ECMO と IABP を併用しても循環動態は破綻していた。順行性の補助循環を付加する

ことによる心仕事量の軽減、冠血流の増加を期待して、IABP を抜去し Impella を導入した。Impella の導入直後より、循環動態は安定した。心機能は徐々に改善し、第 5 病日に VA ECMO から第 9 病日に Impella から離脱した。神経学的予後は良好で患者は社会復帰を果たした。

【結論】 院外心停止患者に ECPELLA が効果的であった。院外心停止に対する ECPELLA の適応に関して、今後さらなる症例の蓄積、経験が必要である。

8-6.

Surgery decision-making in patients : How to best supply support for medical information provision to facilitate informed consent.

（社会人大学院博士課程 4 年東京医科大学　医療の質・安全管理学分野）
○西山　正恵
（東京医科大学　医療の質・安全管理学分野）
三木　　保、高橋　　恵、三島　史朗
（東京医科大学　消化器・小児外科学分野）
勝又　健次、真崎　純一

【Background】 Sufficient patient understanding of the medical information may affect their treatment course and satisfaction. Therefore, we investigate the best support for surgery decision-making for patients based on results of a questionnaire survey of patients who had surgeries to clarify what type of information enhances their understanding of the disease and the treatments, including surgeries.

【Methods】 We targeted patients admitted at Tokyo Medical University Hospital and scheduled for lower gastrointestinal surgery from January to July 2021. We investigated the patient's medical records and administered a questionnaire post-survey. The questionnaire had questions about patients' understanding of the medical information from their physicians and their own voluntary acquisition of medical information.

【Results】 We obtained 50 responses. Of the respondents, 84% who had surgeries were satisfied with their treatment, including surgeries ; 80% understood the medical information provided by their physicians ; and 34% voluntarily obtained medical information from a website. Otherwise, some patients wanted to improve the timing or method of the explanations and the explanation of the complications based on their descriptions in the questionnaire responses.

【Conclusion】 Patients scheduled for surgeries needed enough time to make decisions and detailed explanations of the surgeries, including complications, which would allow them to realistically imagine the changes in their own bodies. Patients with a proper understanding their physician's explanations can participate in active treatment, and thus benefit from the therapeutic effect.

8-7.

アトピー性皮膚炎に対するデュピルマブ投与による眼症状への影響と副作用の検討

（東京医科大学　臨床医学系　眼科学分野）
○山本　香織、川上　摂子、成松　明知、
高野友理華、若林　美宏、後藤　　浩
（東京医科大学　臨床医学系　皮膚科学分野）
伊藤　友章、大久保ゆかり

【目的】 デュピルマブ（DUP）はアトピー性皮膚炎（AD）に有効な治療法として普及しつつあるが、副作用として結膜炎の出現がある。DUP 投与による眼症状への影響と副作用について検討したので報告する。

【対象と方法】 対象は当院皮膚科で DUP の投与が開始された AD 症例のうち、投与前後に眼科を受診した 35 例 70 眼で、男性 19 例、女性 16 例、年齢分布は 16～63 歳であった。DUP 投与前後の眼症状に対する影響と副作用について調べるとともに、EASI（皮疹重症度）と BSA（皮疹面積）との関係を検討した。

【結果】 DUP 投与前の EASI は 37.7 点、BSA は 68.6%、頭頚部 EASI は 4.2 点、頭頚部 BSA は 7.3% であった。DUP 投与前に眼症状も治療歴もなかったのは 16 例、眼症状に対して治療中だったが症状が消失していたのは 2 例、眼症状はあるが未治療であったのは 7 例、治療中であったが眼症状もみられたのは 10 例であった。DUP 投与後に眼症状を訴えたのは 21 例で、投与から症状出現までは平均 29.3 日（1～112 日）だった。症状は掻痒、結膜充血、眼瞼腫脹で、角結膜炎、眼瞼炎がみられたが、抗ア